



備中松山城 天守閣



三の平櫓の土塀(重文)

から女性の二人連れが石段を下ってきた。被写体としては申し分ないが、現在はプライバシーの問題があり、やたらにシャッターを切るわけにはいかない。アングルを考えているうちに、すれ違ってしまった。上っていくと厩(うまや)

門跡、厩曲輪(くるわ)跡、御膳棚跡をへて、二の櫓門跡に出た。前方に天守が見える。二の丸は公園風にベンチが置かれている広場で、突き当りの石段を登ると本丸南御門、その正面が天守(重文)である。もうひとつの重文の二重櫓は天守の先にあるが、往きそびれてしまった。天守は二階二層。外装は白の漆喰。縦方向に黒い腰板が張られている。再建されたのは、昭和41年。天守の特徴は、中央の唐破風の部分。出格子窓が設けられ、石落としの機能を持つている。石落としは、床の一部を石垣上に張り出して儲け、敵兵に石を落として防衛する設備だ。天守に入ると、その石落としや連子窓れんじまどが間近に見られる。連子窓は角材の角を外側に格子状に並べ、外から内は見えにくく、内から外が広角に見やすいように工夫されている。三の平櫓の土塀で見てきたが、ここでの狭間は、天守内部から敵を攻撃するために設けられた穴。壁の厚みを利用して外の正方形または長方形を小さくして防衛し、内側を広くして外敵の見える範囲

ったという。急な山道を息せき切って登っていくとき、サルに襲われたら、男性でも防ぎようがない。備中松山城は、標高430mの小松山の山頂に築かれた城で、天守が現存する山城としては一番の高さという。城内には重要文化財の指定を受けている天守、二重櫓、土塀の一部が残っている。戦国時代までの合戦は、弓や馬が主流であったから、防衛のために城が山の上に築かれた。城主は普段は麓の居館で生活し、戦うときだけ山城に立て籠もるわけだ。こうした城を根小屋式城郭

と呼ぶ。戦いがなくなった江戸時代にはなくなっていくが、備中松山城では近世まで続いた。両側を石垣で囲まれた大手門跡を入り左へ折れりと修復された白い土塀(重文)が続いている。土塀には、敵の攻撃に備えた正方形の鉄砲狭間(はざま)と長方形の弓狭間があけられている。土塀に沿って踏面がやけに広い石段を上っていくと、左手に三の平櫓跡、右手に三の丸跡の広場がある。草地の中には足軽番所跡や上番所跡の碑が立っているが、碑だけではイメージがわかない。上

備中高梁を歩く

たかはし

清水克悦

伯備線は倉敷を過ぎると、高梁川に沿って走る。総社を過ぎて渓谷に入ると、やがて備中高梁駅に着く。岡山から一時間弱。特急なら30分ほどである。伯備線はさらに川を遡って新見を過ぎて米子に抜ける。備中高梁は、江戸時代には松山藩の城下町、明治以降もこの地域の中心であった町である。今回、備中松山城跡、武家屋敷、頼久寺、薬師寺、松連寺などをめぐった。二泊もしたので、ゆったりした旅であった。

旅のスタートはハブニングから

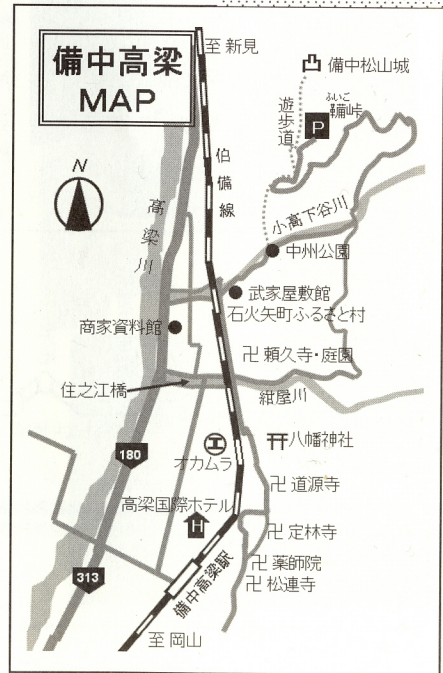
Mという名の旅館を予約した。「夕食を用意していますから、必ず来られますね」と念を押された。「行きますけど、なぜ?」「食事を用意して待っている、来ないお客さんがいるので...」『M旅館』の玄関に

入ったのは、予約通りの14時である。若い女性が応対に出てくるなり、「今朝身内に不幸があった、夕食を用意できなくなりました。すよ。だれもないんです」という。なるほど、人の気配がない。「あなたはいかなくていいの?」「お客さんが見えるので...食事処は紹介しますから。宿泊名簿には、この二、三日間は一人も泊まっていない。この女性は独身かな?..そんなことを思いながら、荷物を預けた。

備中松山城へ

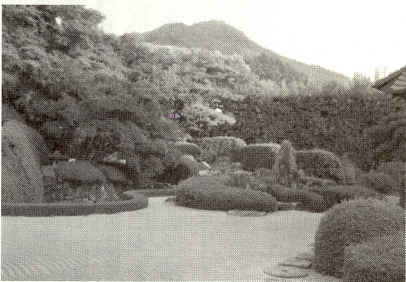
備味(ふいごとうげ)にある駐車場でタクシーを降りた。左手の山道が城への道である。天守までは急で

長い。途中、高梁川と高梁の中心部を見下ろせる台地に出た。物見櫓(やぐら)らしい。「この道しかないのでしょうか」少し上で休んでいた老夫婦に声を掛けられた。自然保護とのバランスが難しいが、確かに、もう少し上まで車が入る方が観光客には親切だ。「棒を持つな」「サルと眼を合わせるな」とか注意書きが立てられている。自然動物園があったところは、女性たちがサルに襲われた話をたびたび聞いた。200匹ほどいるらしいが、今はサルが出てこない。餌がないので、山奥へこも





石火矢町ふるさと村・武家屋敷



頼久寺の庭園

0石取りで、近習役や番頭役名などを勤めた武士の住宅。藩主・板倉勝政の生母の実家である。寺院や数奇屋風の要素を取り入れた珍しい造りだ。藩校・有終館学頭であり、勘

定奉行のとき藩の財政を立て直した山田方谷が四歳のときの書一風月、「神農」（ともに複製、六代藩主・板倉勝職（かつね）の書などがある。教育委員会の案内板は詳しくていいが、多くの観光客は建築の構造には疎い（？）のだから、できるだけ図示してほしい。たとえば解説の一部分だが、「屋根は流れ向拝、その側面はすがる破風とし、棧瓦葺き、南北の破風は入母屋造り掛瓦の葺甲葺き、三ツ花懸魚を取り付け、寺院を思わせる」には、ひと工夫がほしい。頼久寺は、小堀遠州が造った庭園が有名だが、頼久寺の名は、永正年間（1504～1521）に城主であり中興開基の上野頼久の名「頼久」による。この寺は、足利尊氏が諸国に命じて建立させた安国寺のひとつで、正式には天柱山安国頼久寺という。境内の奥には寺号になった中興の開基・上野頼久の墓と備中兵乱で非業の死を遂げた城主・三村元親と一子・勝法師丸、父・家親の墓がある。徳川氏の時代、小堀遠州の父が松山城の代官となつたのは慶長5年（1600）。遠州は、慶長14年

大政奉還に立会い、明治維新後は上野東照宮の宮司を勤めている。安政の大獄に反対して幕府から免職された過去の傷が、うまく切り抜けた理由ではないだろうか。

石火矢町の武家屋敷から頼久寺へ

ての役割を担っていた根小屋跡である。左手の路地は石火矢町。路地の両側には白壁の長屋間や土塀が続く武家屋敷である。旧折井家は、江戸時代後期に建てられている。当時、160石の馬廻り役を務めた武士が住んでいた。玄関で等身大の人形が出迎える。うまくできている。奥の間では人形たちがなにより談笑中。廊下に竹が並べられた作りは泥棒への用心のためだろうか。旧埴原家は、江戸時代中期の建物

120石～150石取りで、近習役や番頭役名などを勤めた武士の住宅。藩主・板倉勝政の生母の実家である。寺院や数奇屋風の要素を取り入れた珍しい造りだ。藩校・有終館学頭であり、勘

を広くする工夫をしている。装束の間は、籠城時の城主一家の居室。落城のときは死に場所でもある。天守の中にある囲炉裏は、籠城時の城主の食事暖房用として使われたという。これは珍しい。

ちよつと備中松山城の歴史を

この山にはじめて山城を築いたのは、相模の三浦一族の秋庭重信。鎌倉時代の承久3年（1221）に後鳥羽上皇が鎌倉幕府から政権を取り返そうとした承久の変があった。上皇方は敗れ、勝った北条方の秋庭重信が北条義時から地頭に任じられ、小松山のさらに上の大松山に砦を築いたという。その後は、城主が次々に替わっていく。山陰と山陽を結び、東西の主要街道も交差する要衝であるため、争奪戦が繰り返されたためだ。

室町時代末期、城主が三村元親のときが、毛利勢に備えたため、最も城の規模が拡張された時代だ。当時毛利氏と織田氏が緊張関係にあった。元親は「毛利が京に上がる邪魔をしてくれたら、備前、備中の二国

を与える」という織田方の密使の誘いに乗ったが、頼みの織田の援軍が来ない。元親は一人の従者もないまま、松連寺で自刃した。この一連の戦いを「備中兵乱」という。



定林寺にある初代・水谷勝隆、三代・勝美の墓



現在は頼久寺にある三村元親の墓(右から2番目)

勝った毛利氏も、関ヶ原の戦いで徳川勢に敗れると、徳川家康の代官・小堀氏がやってきた。中世武山城は戦いが収まった徳川氏時代には重視されなかった。城主の館も武士たちの屋敷も山の下に移された。城下町の形が次第に整っていったが、山城は荒れるに任せていた。小堀氏は麓の頼久寺を住まいとした。小堀家の二代目が造園、将軍家茶湯指南として知られた遠州である。遠州も頼久寺に住み、このとき城の修理をしたらしい。現存する松山城は、江戸時代の初

期の天和元年（1681）から天和3年（1683）にかけて水谷勝宗（みずのやかつむね）によって修築されたもの。しかし、この水谷氏には跡継ぎがいなかったため、三代で家が絶え、領地が取り上げられてしまった。城の受取りに来たのは赤穂藩の大石蔵之助たち。三年後には同じ運命が赤穂藩にも降りかかるとは、思ってもよらなかったろう。最後の松山城主は板倉氏。七代、125年続いた。七代目の勝静（かつきよ）は最後の将軍・徳川慶喜のときの老中首座。朝敵であるのに、

(1609)から元和3年(1617)まで8年間、代官として遺領を継いだ。松山城は備中兵乱後で荒廃していたことから、遠州は頼久寺を館として政務をとっていた。頼久寺の庭園はそのころの作庭。蓬萊式枯山水庭園は、昭和49年に国の名勝に指定されている。愛宕石山を借景に、白砂敷の中央に鶴島、後方に亀島がある。スピーカーから流れる解説を聞きながら、庭の風景を追っていくと、わかりやすい。鶴島は、三尊の石組みを中心に、周囲をサツキの刈り込みで中島を表現し、亀島は確かに亀の姿。背後のサツキは大海波を表現しているのもわかる。

城の石垣を思わせる 薬師院と松連寺

M 旅館に泊まった翌日である。朝が早いせい、備中高梁駅前食事処「なりわ屋」は、客がない。私はコーヒを飲みながら、寺めぐりのコースを計画していた。よく知られた頼久寺や薬師院、松連寺のほかに、伯備線の東側に小さな社寺が十数社ある。これをめぐってみた

勾配の大屋根をもつ薬師堂は、江戸時代初期の元和10年(1615)に建てられている。50年ごとに秘仏のご開帳法要があるというが、運がよくても一生に一度しかお目にかかれない。窮屈な厨子の中より、薬師さまはみんなに会いたがつているに違いないの……。

隣の松連寺は墓石が見えるので、寺とわかるが、高く積み上げられた石垣は正に城壁。本堂右手の観音堂には、秀吉が朝鮮出兵した文祿の役(1592~1593)の総督・宇喜多秀家の御座船の格天井と船戸があるという。お寺の事情で現在は観光客にまで手が回らず公開されていない。朝鮮出兵には、松連寺の有海法印が従軍させられ、戦勝を祈らされた。その功績で33体の観音像を彫刻し、観音像を納める観音堂を建立したという。境内には大きな宝篋印塔(ほうきょうおんとう)と清水比庵の特徴がある字体の歌碑がある。再び先に見た薬師院の山門下まで戻り、「従是頼久寺二八丁」と彫られた大きな石柱の脇の小道を頼久寺方面に向かった。

いと思った。それには、大きなサツクがじゃまだ。「駅にコインロッカーありますかね」おみさんに声を掛けた。「うちで預かってあげますよ」

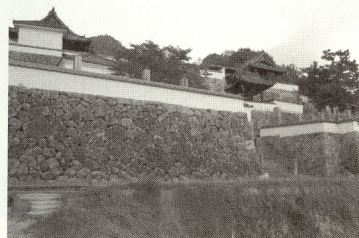
私は、小さなサツクを背にして、まず駅の東側の薬師院と松連寺をめざした。薬師院と松連寺は、備中松山城の山城の山城の出城ともいうだけに、石垣は城の石垣のようで寺とは思えない。写真に撮ったが、どうしても整骨院の大きな看板が入ってしまう。薬師院の門前にいたお年寄りに、遠くならけど松連寺の東側から撮るといいと教えられた。91歳という年齢なのに、体の動きは60歳代だ。健康法から始まって、精進料理のご家族のことまで、私はずっと聞き役だったが、長々一時間も話し込んでしまった。昭和7年の室戸台風の時、山から流れ出た水で、私たちの前に並んでいる六地藏が倒れ

小さな社寺をめぐる

小さな寺のはじめは、道源寺。境内に藩老・熊田恰矩(あつむ)の墓がある。幕末の松山藩主は板倉勝静(かつしず)上。鳥羽伏見の戦いに敗れた後、朝敵となった。幕府老中首座であった藩主の勝静は、江戸、東北、北海道と藩主だけが転

戦した。松山藩の家老である熊田恰は、藩を兵火から守るため藩を恭順に導き、一人責めを負って自刃した人。山門前の石段左手には、天誅組の原田亀太郎の墓もある。片や幕府老中、片や倒幕の先駆け。時代に翻弄された人々だ。左手に、このあたりでは大きなオカムのの事業所が見える。かつては、日本たばこ産業の高梁工場だったところだ。

次は定林寺。墓所に江戸時代の寛永19年(1642)から元禄6年(1693)の51年間藩主であった水谷家の初代・水谷勝隆と三



松連寺の石垣



薬師院山門

たと聞き、自然の恐ろしさにびっくりました。

「ほれ、あそこを見てご覧なさい」指差す先には薬師院の大棟の十六弁の菊の紋。花山法皇の開基だからだ。平安時代の寛和(かんな)年間(985~987)に開かれていた。石段を登り山門をくぐると高台にある境内に出た。丘陵に囲まれた高梁の町が眼下に広がっている。山門の先には宿泊を予定している高梁国際ホテルが見える。高梁市は人口4万人。見下ろしているのはその中心部だが、あまり高い建物はない町並みだ。薬師寺の本尊は薬師如来。急な

代・勝美(かつよし)の五輪塔がある。毎年8月14日から3日、備中高梁駅前大通りで開催される「松山踊り」は、10数万人が訪れ規模は県下一の規模だが、水谷勝隆が藩主であった慶安元年(1648)に五穀豊穰と町屋の繁栄を祈って踊ったのが始まりという。また、勝隆は玉島新田の開拓や、高梁川の水路の開発に貢献した藩主という。

予定をしないなかった八幡神社に寄ったのは、路地ののどかさ。素朴な両部鳥居をくぐって、彼岸花やコスモスが咲く細い道を辿ると地神塔が道端に建っていた。隨身門をくぐると境内で、正面に本殿。現在



八幡神社の両部鳥居



八幡神社の絵馬掛け

の本殿は二代・水谷勝宗により再建されたというが、近年修築もされているように見える。案内板を読んでいると、松山城の鎮守であったことがわかる。境内の絵馬掛けには絵馬が二つしかかかっていない。都心の幾重にも重なり合った絵馬よりも、神様は二人だけなら親身に面倒を見てくれそうだ。

この後、寿覚院・巨福寺(こうふくじ)、龍徳院をめぐってやっと食事処に出会ったが、疲れているのか食欲がなかった。

こやがわ 紺屋川から本町通へ、 そして駅前へ

ひとやすみしてから、かつては備中松山城の外堀の役割を果たしていたという紺屋川(伊賀谷)いがだに(川)を高梁川に向かって下った。昭和7年の室戸台風で氾濫し高梁市内を水没した川とは信じられない僅かな水量だ。両側は桜並木。歩くなら桜の咲くころがいいだろう。この紺屋川に沿う道は、「日本の道100選」に選ばれている。川沿いの藩校・有終館跡の土塀が気に入った。

た。瓦と練り土を交互に積み重ねているらしい。観光物産館もある。川の反対側にある「ゆべし」の店にも立ち寄った。店に飾っている人物画は店の人に聞いてみる

と板倉勝静。NHKの大河ドラマを見ていて、家にある絵が板倉勝静と知ったそうだ。

南へ歩き、商家資料館にも寄ってみた。高梁川を航行した高瀬舟の船主、両替商、醤油製造販売で財を成した池上家の邸宅である。外観がどつしりとし、いかにも豪商という感じだ。当時の資料が展示されているが内容はやや物足りない。それよりも本町通りの商家の町並みを保存



藩校・有終館跡の土塀



紺屋川近くの商家

してこういうという姿勢に引かれた。再び住之江橋まで戻り、県下最古の教会・高梁基督教會堂を写真に撮り、正善寺や板倉家の菩提寺・安正寺、明治37年(1904)に建築された小学校を利用した郷土資料館に立ち寄ってから、駅前の「なりわ屋」に戻った。預けたザック代が無料では申し訳ないので、またコーヒーを頼んだ。食欲がなくても、胃が不調でも、コーヒーが飲みたくなる。